

ポツンと診療所 ～私の理事長就任顛末記～

富良野医師会
中富良野町立病院

本田 拓

今まで院長ではあっても、所詮は勤務医という雇われ身分しか経験のない私だった。が、かねてより、一生に一度は、理事長になってみたいと思っていた。そういう思いを巡らせていたところ、隣町の診療所の所長が病気で休んでおり、新理事長を探しているという情報をその町から来た患者さんから得た。人口1,700人の過疎の町に、診療所は一軒ポツンとあるだけ。もちろん、救急患者のすべてが搬送されるし、医師は一人だけだから、昼間の勤務の後は、そのまま当直勤務となる。翌日も、日勤を終えると当直勤務に入る。厚労省の提唱する「医師の働き方改革」とは、まったく逆行する年間2,000時間を超える残業をしなければならない。知り合いの医師から「やめた方がいいのでは？」と助言されたが、理事長になりたかった私は、院長でかつ公務員の安定した身分を捨て、まさに「火中の栗を拾う」というか「狂気の沙汰」と言ってもいいような、一人有床診療所の理事長となった。契約期間は、5年。前任者は10年契約だった。私にはそんなに長くはできそうもないと、就任前から確信が持てた。

平成26年5月1日より、平成31年3月31日まで理事長を務めたのだった。で、やってみてどうだったのか？一言でいえば、「燃え尽きた！」と言える。良く言えばやり尽くしたし、悪く言えばまさに疲弊した。5年間のうち入院が3回、手術が2回。これは、患者のことではなく、私個人がかかった病である。インフルエンザにかかっても、腹痛で横になりたくても一日も休まず診療した。5年前の最初の月は、外来患者が月600人だった。給与を支払う立場になった私は、巻き返しを図ることとなった。そこで、休日夜間の時間外患者もコンビニ受診も含めて、一切断らずに診療した。そうすると、半年後には、月外来患者数は1,000人を超えた。職員への給与も何とか支給できるようになった。先輩開業医師の先生から見れば、月に1,000人なんて大したことではない、となるだろうが、昼も夜も仕事、平日は毎日当直、土日も隔週しか応援医師が来てくれない状況の中での数値には万感の思いがある。毎日朝7時には、病棟を回診し指示書きを行う。レントゲンはもちろん、上部下部内視鏡、超音波検査、CT撮影も自分で行わなければならない。特養の配置医でもあり、グループホームや個人宅への訪問診療もある。さらには産業医も兼ねており、職場巡視もしなければならない。手を抜かずに患者を詳しく診断しよう

とすればするほど、時間がかかり自分で自分の首を絞めることになる。

そこで、改革を行った。検査はドライケムにして、その日のうちに結果を患者に説明。院内調剤を院外調剤に切り替え、在庫管理の面倒を解消。カルテは電子カルテに変更し、紙媒体を一切排除した。さらに、自身の居住空間を院内の倉庫に移し、緊急対応をより迅速にできるようにした。通勤時間が20秒となった。これで、月1,200人まで何とか外来患者を診ることが可能となった。

しかし、安穏な日々は長くは続かなかった。最後の入院患者が亡くなったのを機に、看護師が次々と退職し、ついに、常勤看護師はたった一人となった。看護師一人に医師一人、事務員三人となり、診療所の総職員数は、理事長就任時の3分の1以下となった。当然、入院機能を停止せざるを得ず、食事の提供も不必要になった。調理職員も去った。本当の「人的ポツンと状態」になった。これで、町内に入院可能な病床がゼロとなり、何とか解消すべく看護師探しに精を出した。東京や沖縄などの遠隔地から、短期派遣看護師に来てもらったものの、「思ったより寒い」とか「電気代が高い」とか、私の力では如何ともし難い理由で、みんな立ち去っていった。結局、入院不能状態が契約違反であると、苦情の鐘が乱打され、私は苦境に陥った。そして、入院再開ができないのであれば、退任してほしい旨を持ち出された。依然（まっとうな）看護師は見つからず、入院再開の見通しが立たず、任期の契約更新はせずお役御免の方向となった。その後の私はまさに「死に体」状態となった。徐々に終焉の幕は下ろされ、平成最後の記念すべき日に町を去った。

以上が、私の理事長顛末記である。

